

## アウグスチヌスの三位一体論的思惟について

村 上 一 三

アウグスチヌス哲学は三位一体的思惟の発展である。ここで三位一体的思惟というのは、すべてのものに三位一体的構造をみいだすことである。では三位一体的構造とは何か。それについて、アウグスチヌスは様々な表現で語っているが『83問題集』では「存在するものはすべて、一つにはそれによって存在する (constare) ものであり、一つにはそれによって識別される (discernere) ものであり、一つにはそれによって関わる (congrere) ものである<sup>(1)</sup>」と語っている。存在するものは全体として一つであり、一つの本質、一つ生命、一つの精神であるが、三つのいわば位格 (persona) をもっているのである。しかもそれぞれのペルソナは他のペルソナが果すことができない独自性をもっているのである。アウグスチヌスがすべての被造物のうちに、尺度 (mensura)、数 (numerus)、重さ (pondus) をみいだしたり、規準 (modus)、<sup>(2)</sup> 形象 (species)、秩序 (ordo) をみいだす時、<sup>(3)</sup> それぞれ三つのものは、全体として一つのうちにありながら、しかも独自のものであり、第1のものは、すべてのものがそこから存在する存在の根源的原因を、第2のものは、すべてのものがそれによって造られ、何らかの仕方で形づくられる形相を、第3のものは、すべてのものがそのうちにおいて存在する恒常性を示しているのである。そして『83問題集』で語られている「それによって」という言葉は、神の三位一体に対応しているのである。アウグスチヌスが、その聖書の根拠としているのは、ローマ書11章36節の使徒パウロの言葉である。<sup>(4)</sup> 「万物は神御自身から (ex ipso)、神御自身によって (per ipsum)、神御自身において (in ipso) 存在する。」

ここで、ex ipsoとはそのものから万物が存在する根源的原理であり、per ipsumとは、それによって万物が識別される形相的原理であり、in ipsoとは、それにおいて関係づけられる、持続的原理である。そしてex ipsoは御父 (Pater) に、

per ipsumは御子 (Filius) に、in ipsoは聖霊 (Spiritus Sanctus) にそれぞれ対応しているのである。

従って被造的存在の三位一体的構造の原因は、神の三位一体に存する。このことは人間存在の探究において、一層重要な意義をもっている。アウグスチヌスは、『創世記』1章26節で「我々は人間を我々の像 (imago) と類似 (suisimilitudo) によって造ろう」と神が語り給うところの「我々」という複数を神のペルソナの三位と解するのである。

そこから、アウグスチヌスの生涯にわたる探究の課題である「神と魂を知りたい<sup>(5)</sup>」という問題が、実は三位一体的構造の問題であるということが明らかとなるのである。つまり、創造主なる三位一体の神と、その似像として造られた三位一体的構造をもつ私の魂を知りたいということなのである。

では私の魂のうちにみいだされる三位一体的構造とはどのようなものであろうか。それについても、アウグスチヌスは様々な表現で語っているが『独白』では理性 (ratio) がアウグスチヌスに次のように語っている。

「誰も知識によって悲惨にならないと君は信じている。それゆえ、知性は人を幸福にするということが是認される。しかるに生きている (vivere) のでなければ、誰も幸福ではないし、存在する (esse) のでなければ、誰も生きていない。そこで存在すること (esse)、生きていること (vivere)、知解すること (intelligere) を君は欲する (velle) のである。しかしながら、君は生きるために存在するのであり、知解するために生きるのである。それゆえ君は君が存在することを知っており (scire)、君が生きていることを知っており、君が知解することを知っている<sup>(6)</sup>のである。」

ここで存在すること (esse)、知解すること (intelligere)、生きること (vivere) という三位一体的構造が指摘されるのである。しかも生きるということは、アウグスチヌスにおいては、意志する (velle) ということと類似のものである。というのもアウグスチヌスにとって生命 (vita) は何かへの関わりをもっており、生命は本来意志的なものである。従って生きるということは存在することと知解することと関係づけているのである。また『告白』では次のように語られている。「私は存在し (esse)、知り (nosse)、意志する (velle)。私は知りかつ意志する者として存在し、自分が存在し、意志することを知り、また存在し、知

(7)  
 知ることを意志する。」

このように、存在すること (esse)、知解すること (intelligere)、生きること (vivere) とか、あるいは存在すること (esse)、知ること (nosse)、意志すること (velle) といういわば魂における三つの位格は、すでにのべたような構造に対応しているのである。従って、規準 (modus) とか尺度 (mensura) とは存在的観点から、形象 (species) とか、数 (numerus) とかは認識的観点から、また秩序 (ordo) とか、重さ (pondus) とかは意志的観点からみられるものである。

それゆえアウグスチヌスが人間の魂 (animus) あるいは精神 (mens) について語る時、つねに三位一体的構造をもつ存在として把握しているのである。だから、アウグスチヌスの存在論を語ろうとする者がまず注目しなければならないのはこの点である。

ところで、存在、知性、意志は、一つの本質、一つ生命、一つ精神でありながら、三つのものとして区別される。しかしながら三つのものがいかなる仕方であるかは決して判明なことではないが、アウグスチヌスにとって、存在と認識とは対立するものではなく、むしろ相補的なものである。実際、我々が知るといふことは何か存在するものについて知るのであり、また知るといふことは知ろうと欲するのでなければならぬ。また欲するといふことが生じるためには、何らかの仕方、知っているのだから知らなければならない。全く知らなければ知ろうと欲しないであろうし、少くとも知らないといふことも知っているのだから知らなければならない。

だから神を探究する場合、みいだそうと、たずね求めるのでなければ、神について知ることではできないが、しかし神をみいだしていないといふことを少なくとも知っているのだから、たずね求めることすらしないのである。このような言表は、プラトンの想起説に類似している。しかしアウグスチヌスの方法は神の似像 (imago Dei) としての魂の三位一体的構造に求められねばならないのである。というのもアウグスチヌスは「告白」の冒頭で次のように語っている「主よ、どうか私に知らせ (scire)、知解させ (intelligere) 給え。あなたを知ること (scire) と呼び求めること (invocare) といずれが先であるかを。<sup>(8)</sup>しかるに知らないで誰があなたを呼びもとめることができよう。」また『三位一

『体論』では次のように語っている。「たずね求めているものがいかに把握されがたいものであるかをみいだすことができた者は、何もみいださなかったと思わないように、把握されがたいものはたずね求められねばならない。それゆえ、たずね求めていたものが把握されがたいものであるということ把握するならば、まさに把握されがたいものの探究において前進し、またみいだされるために、たずね求められ、たずね求められるために、みいだされるほど大なる善をたずね求める者はますます善き者となる限り、とどまるべきではないということ<sup>(9)</sup>でなければ、一体なぜこのようにたずね求めるのであろうか。」

このようにして、神をたずね求めつつみだし、みだしつつたずね求めるのであって信仰から知解へ、知解から信仰へと限りない進歩がある。実際、魂はその方へ向けて造られた創造主に対して根源的志向性をもっており、この志向性は知性と意志とを含んでいる。

それゆえ知性 (intellectus) とか理性 (ratio) とかいはれるものを、それによって「みいだすこと」(invenire) であるとし、また意志 (voluntas) とか愛 (amor) とか信仰 (fides) とかいはれるものを、それによって、「たずね求めること」(quaerere) であるとするれば、たずね求めることとみいだすこと、即ち信仰と理性、意志と知性とは相補的に関係しているのである。

意志と知性が相補的に働くことによって魂の内奥へ進む。ところで人間の魂は不思議なあり方をもっている。外的世界に対しては外出し (distendere), 内的世界に対しては内出し (intendere), 創造主に対しては超出 (extendere) する。今、神をみいだそうとたずね求めるものは内的人間に向わねばならない。そうして魂の内奥へ進むとき、存在、知性、意志という三位一体的構造を基本として、様々のあり方がみいだされてくるのである。存在すること (esse), 知ること (nosse), 生きていること (vivere), 知ること (scire), 思惟すること (cogitare), 記憶していること (memihisse), 知解すること (intelligere), 意志すること (velle) 判断すること (judicare), 疑うこと (dubitare) 等々

精神が思惟するものとして自己を知る時、自己が生きており、記憶し、知解し、意志し、思惟し、判断していることを疑うことはできないのである。なぜならば、もし彼が疑うなら、彼は生きており、彼が疑うなら、なぜ疑うかを彼は記憶しており、彼が疑うなら彼は自己が疑っていることを知解しており、ま

た疑うなら、彼が確かであることを欲しており、もし彼が疑うなら、彼は自己  
が知らないことを知っており、さらにもし彼が疑うなら根拠もなく同意すべき  
でないと判断しているからである。さらに彼が存在しないとすれば彼はいかな  
ることについても疑うことはできないのである。<sup>(10)</sup>

こうして、魂の内奥に入ることによって、上記のごとく、様々なあり方がみ  
いだされてくるが、それらは無限の層をなしていて、その底は測りがたいほど  
である。しかしここで重要なことは自己が存在するということが疑うことがで  
きないということである。

かかる仕方は、デカルトの懐疑の方法に類似している。思惟する自己だけを  
絶対に疑うことのできないものとして自己存在の直接的な確証をデカルトはと  
りだすのである。しかるにデカルトは思惟する自己を思惟実体として、それを  
哲学の原理としている。しかしアウグスチヌスは、疑っていることが確かであ  
る根拠、つまりどこから確かであるのかをたえずたえず求めているのである。<sup>(11)</sup>  
またアウグスチヌスにとって cogitare とは記憶に散在していたものを集めて、  
形象としてみることであって、記憶に刻印されたままの知は、nosse として区別  
されているのである。識知 (se cogitare) と存知 (se nosse) とが区別される  
ゆえんもそこにある。<sup>(12)</sup>

ところで、アウグスチヌスは外的人間から次第に内的人間に向かえ過程にお  
いて、すでに述べたような三位一体的構造がどのように成立しているかを探究  
している。

まず我々が何かある物体を見る時三つのものが識別される。第一に見られる  
ところの事物自体 (ipsa res quae videtur) があり、第二に視覚 (visio) があり、  
これは感覚に提示された事物を感覚する以前にはなかったものである。第三に  
それが見られる限りにおいて見られるところの事物に視覚を保つ、精神の志向  
性 (animi intentio) がある。<sup>(13)</sup>

次に、感覚される物体が取り去られる時、その物体の類似性が記憶のうちに  
残る。そこで、そこから形づくられたまなざし (acies) を意志は再び記憶へ向  
ける。このようにして、記憶 (memoria)、内的視覚 (interior visio)、意志  
(voluntas) という三つのものが区別される。<sup>(14)</sup>

さらに、この記憶のうちに形象 (species) が刻印されることから、そこから

思惟するもののみならず<sup>(15)</sup> (acies) が生まれ、また意志は両者を結びつける。

こうして、認識される物体の形象から認識する者の感覚のうちに生じてくるものがあり、このものから記憶のうちに生じてくるものがあり、さらにこのものから思惟する者のみならず<sup>(16)</sup>のうちに生じてくるものがあるのである。従って意志は、いわば生みの親 (parens) と生まれた子 (proles) とを三度結びつけるのである。

このような三つの段階における三位一体的構造は確かに神の三位一体である、御父、御子、聖霊に類似している。しかしながら、いづれの段階においても何らかの統一を三者はもっているが、しかし三者が本質において同一のものであるということはできないのである。

そこで真に三位一体である御父、御子、聖霊としての神の場合についての探究がなされねばならない。アウグスチヌスは、『三位一体論』において、まず神の三位一体とはいかなるものであるかを探究している。ここでは多くを語ることはできないが、まず聖書において、御父、御子、聖霊の同等性 (paritas) と均等性 (aequalitas) が語られていることを指摘し、御子の派遣 (missio) をしもべの形 (forma servi) と神の形 (forma Dei) とに区別して、その本質が同じであることを語る。さらに神は本質において一つでありながら、ペルソナとして御父、御子、聖霊の三つに关系的に区別されるという事柄を追求しようとする。

ところで、神の三位一体が、それ自体としていかなるものであるかということは、我々の弱い知性によっては把握することはできない。一つの本質にして、三つのペルソナが关系的に区別される神の三位一体それ自体を我々は把握することはできず、我々が何か語るとしても、それ自体を把握しているが故に語るのではない。かえって沈黙しないためである。我々は本質を類とし、ペルソナを種ととし、一つの動物、三つの馬という仕方で語るとしても、かかるものは神の三位一体といかに異ったものであるかを知るのである。<sup>(17)</sup>神の三つのペルソナの区別は単に概念的なものではなく実在的なものである。<sup>(18)</sup>

では御父、御子、聖霊は実在的にどのように区別されるのであろうか。

御父は神性 (deitas) 全体の根源 (principium) であり、そこから御子を生むという仕方で根源である。また聖霊は御子とともに発出するという仕方で根源

である。しかしながら御父は、いかなる意味においても生まれざるもの(ingenitus)であり、あらゆるものが、そこから発出する唯一絶対の根源なのである。<sup>(19)</sup>

次に御子は御父から生まれたもの(genitus)である。生まれた者は生む者の似像(imago)であり、御子は御父と本性を同じくするという意味において唯一の似像である。似像とは何よりも何かあるものの似像である故に、関係的に(relative)語られるのである。そして似像は御父が御言(Verbum)を発出するということにおいて関係的に語られるのであり、御言はペルソナである。いうまでもなく、この御言は言及されることもできず、音響し、過ぎ去ってゆくのもなく、御父とともにあったところの御言であり、万物がそれによって造られたところの御言である。それは御父と同じ本質であり、常に不可変的であり、常に御父御自身を語り給う御言である。御父について語ることは同時に働き(operatio)なのであり、従って御言は力(virtus)であり、知恵(sapientia)である。今やこの御言が肉となったのである。<sup>(21)</sup>

さらに聖霊は出で来る(exire)のであるが、それは生まれたような仕方、(quomodo natus)ではなく、与えられたような仕方(quomodo datus)で発出したのであった。聖霊は御父と御子との両者から発出したのであって、アウグスチヌスが生まれたような仕方ではなく、与えられたような仕方<sup>(22)</sup>で発出したと語るのは御子と聖霊とが、それぞれペルソナとして関係的に対立するものであって、聖霊が御言と異って意志にもとづく愛の発出であることを示さんとしているからである。というのも、聖霊は愛であり、それは与えられたものとして賜物(donum)にほかならないからである。

神のペルソナについては多くのことが考察されねばならないが、アウグスチヌスの三位一体論における言葉には詳細な研究の可能性を含んでいると思う。

前述のごとく神の三位一体、それ自体は我々の弱い知性によって把握することができないのであり、それは玄義(misterium)であるとアウグスチヌスは語る。<sup>(23)</sup>

そこでアウグスチヌスのたどる道は創造主によって造られたものとして有している類似性(similitudo)による道である。確かに類似性による道は鏡をとおして、謎においてみる仕方ではあるが、できる限り、明瞭にみいだそうとたずね求めるのである。

アウグスチヌスは『三位一体論』の14巻まで探究をすすめて来て、精神の最も内奥において、神に最も類似した精神の三位一体として記憶 (memoria)、知性 (intelligenda)、意志 (voluntas) をみいだしている。これらは一つの本質<sup>(24)</sup> (essentia)、一つの精神 (mens) 一つの生命 (vita) であり、また三つのもは相互に関係することによって三つなのである。しかも記憶はあたかも御父のごとく知性を、あたかも御子を生むごとく生み、また意志はあたかも聖霊のごとく傾きをもって両者を結びつけているのである。

しかしながら精神のうちにみいだされる、記憶、知性、意志の三位一体は神における、御父、御子、聖霊の三位一体に類似性をもつてると同時に、いかに大きな非類似性 (dissimilitudo) をもっていることであろうか。アウグスチヌスは神と精神との間で類似性をみいだせばみいだすほど、ますます非類似性をもみいだすのである。アウグスチヌスは類似性と非類似性のきびしい尾根を登りつづける。

この問題を神と人間との間で共通に語られる言葉 (verbum) をとおして少し考えてみよう。

我々が肉体的感覚を通して、外界の事象 (res) を知覚することによって、感覚の何らかの記録として事象の心像 (imago) が記憶の奥の院に運ばれ、保持されているし、また肉体的感覚によらずして、内においてアイデアとして記憶に保持<sup>(25)</sup>されている事象がある。

このように、記憶が保持していたところのものから言葉が生まれる。しかもこの言葉は音声として響く以前のものであり、音声の似像が思惟においておもいめぐらさせる以前のものである。従ってそれはいかなる言語でもないようなものである。こうして内に生まれた、内なる言葉を精神はながめるのであり、内において語るのである。しかもこの言葉は記憶が保持していた知識と同じ種類のものであり、さらにこの言葉を概念 (notitia) として誰かある人に知らせたいと思う時、意味表示されるために、何かあるしるし (signum) となるのである。たとえば耳を媒介とする場合は音声となり、目を媒介とする場合は文字となるのである。こうして我々の精神のうちに生まれる言葉は肉体的感覚に対して音節をもち、ある言語として、物的なしるしによって、誰かある人に知られるようになるのである。これが外なる言葉である。<sup>(26)</sup>



また言葉は知性として内に抱かれたものを外に概念として生みだされた子のようである時、意志とか愛とかは、まさしくたずね求める者がみいさんとして、そのものへ結びつけようとする欲求として働くのである。たずね求める者はすべて、<sup>(27)</sup> 知ることを欲しており、欲することによって内に抱くのである。

それゆえ、我々の言葉の発出においては意志が同伴するばかりか、まず精神が記憶においてながめようと意志することがなければならぬとすれば、意志することが、言葉の発出に先行しているともいえるのである。

このように言葉をめぐって、記憶と知性と意志とは深い関係をもっているけれども、我々人間の場合、三つのものが全く同等性をもつということとはできない。というのも精神が言葉を生む時、内なる言葉がふさわしい音節や文字によって外なる言葉として表現されない場合があるし、また外なる言葉が語られても、内なる言葉は生まれていない場合もある。このような場合、<sup>(28)</sup> 詐欺や不和や誤解が生じるのである。

しかしながら、神における言葉の発出にはこのようなことは生じない。というのも神の言葉は事象 (res) そのものの原因であり、それによって万物は造られたのである。実際神は「光あれ」と言葉を発することによって、光そのものを、無から存在せしめるのである。

また神においては、言葉としての御子の発出には意志は同伴しないのである。なぜならば神が意志することによって御子を生んだとすれば、御子は御父の意志によって神であって、自己の本性によって神であるのではないことになるからである。また意志に反して御父が御子を生んだとすれば神は悲惨なものとなるであろう。しかし、このようなことは最高の三位一体においてはありえない。<sup>(29)</sup>

また我々は精神が生んだ知性 (intelligentia) としての言葉によるのでなければ、我々は認識することができない。しかし神において、御父は御子によるのでなければ、御自身をも、御子をも、<sup>(30)</sup> 聖霊をも認識できないということは決してない。

このようにアウグスチヌスは、神と魂との間の類似性と非類似性をみいだしながら探究を進めている。ところで類似性と非類似性ととの接点になるものは、「教師論」で語っている、内なる人間に住み給うキリストであろう。<sup>(31)</sup> 内なるキリストこそ言葉であり、それは「私」のうちにあって、しかも「私」を超えて

いる。そして、内なるキリストにおいて、三位一体としての神と人間とは把握されがたい仕方、結びついているのであろう。

## 註

- (1) De diversis quaestionibus 83 : 18  
 (2) De Trinitate XI : XI : 18 ; De civitate Dei XI : XXX  
 (3) De natura boni I : III : 3      (21) De Trinitate VII : I : 1  
 (4) De Trinitate I : VI : 12      (22) ibid. V : XIV : 15  
 (5) Soliloquia I : XV : 27      (23) ibid. V : I : 2  
 (6) ibid. II : I : 1      (24) ibid. XIV : VI : 8  
 (7) Confessiones XIII : XI : 12      (25) De magistro XII : 39  
 (8) ibid. I : I : 1      (26) De Trinitate XV : X : 17  
 (9) De Trinitate XV : II : 2      (27) ibid. XV : XI : 20  
 (10) ibid. X : X : 14      (28) Tractatus in Johannis  
 (11) De vera religione XXXXI : 73      Evangelium I : 13  
 (12) De Trinitate X : III : 5 ; XIV : V : 9  
 (13) ibid. XI : II : 2      (29) De Trinitate XV : XX : 39  
 (14) ibid. XI : III : 6      (30) ibid. XV : VII : 12  
 (15) ibid. XI : V : 8      (31) De magistro XI : 38  
 (16) ibid. XI : IX : 16  
 (17) ibid. V : IX : 10  
 (18) ibid. VII : IV : 7  
 (19) ibid. V : VI : 7  
 (20) ibid. V : XIII : 14